Osaka University Knowledge Archive

Title	「AIを両手に」
Author(s)	浦西, 友樹
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2024, 25, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97788
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

巻頭言「AI を両手に」

サイバーメディアセンター
情報メディア教育研究部門
教授　浦西　友樹

筆者は中年である。「人工知能 (Artificial Intelligence; AI) が世の中に浸透する」、そう聞くと筆者がまず何を置いても思い出すのは映画「ターミネーター」シリーズである。特に、大ヒットした「ターミネーター2」を小学生の時にリアルタイム鑑賞し、「AI 怖い」と深く意識に刷り込まれてしまった世代であると言えば、同世代の方々には共感いただけると信じている。

さて、現実世界において AI は世の中に浸透したのか。「人工知能 (AI)」「深層学習 (Deep Learning)」「生成 AI (Generative AI)」「大規模言語モデル (Large Language Model (LLM)」とさまざまなワードが飛び交い、ChatGPT という名前が技術者、研究者、あるいは物好きだけに通じるものではなくなっている現状を見れば、定義はどうあれ「AI というもの」が世の中で広く認知されていることは間違いない。現状最も知名度が高いフロントエンドであろう ChatGPT がサービスとして世の中に登場したのが 2022 年 11 月と、現在に至るまで 2 年弱しか経過していないことを思えば、世界は急速かつ大きく変化したと言える。もちろん「審判の日」は訪れず、2024 年現在においても AI 時代は（少なくとも現時点においては）思ったより悲劇的な経過を辿っていない。

本稿の読者諸氏においては、いかなる分野であれ、教育や研究に関する業務に従事される方が多くおられると拝察する。コンピュータネットワークが単なる研究対象ではなくなり、インフラとしてあらゆる場面で使われるようになったのと同様に、AI は AI 研究者のものだけでなくなりつつある。コーディングの際は AI が Copilot として常に伴走し、フルスクラッチでコードを書く機会は激減した。生成 AI はプログラミング言語のみならず自然言語や画像や音楽、果ては動画まで生成し、我々は目的を達成するツールとして片手に AI どころか、AI を両手に携えて作業していると言える。これらのツールは教職員のみならず学生も利用しており、むしろ新たなツールへの適応という観点で言えば、学生の方が往々にして高い適応力を見せることは読者諸氏も実感していることであろう。

一方で教育研究の分野においては、評価されるものが「人の造りしもの」であることが重要であり、誰が造っても，たとえ人が造っていなくとも目的を達成すれば良いというわけではない。ここに我々の分野における AI との付き合いの難しさがあり、どのように AI およびその生成物と向き合うか？という問いには現時点では単純明快な答えがない。我々がこれから AI を両手に生きていくにあたり、本号の特集においてご寄稿いただいた様々な知見が読者諸氏の助けになれば幸いである。

なお余談であるが、本稿のタイトルは筆者が敬愛するとあるバンドの曲からお借りしている。ご興味を持たれた方はぜひ一度お試しいただきたい。